

# 「援助交際」というコミュニケーション\*

——援助交際の社会学①——

圓 田 浩 二\*\*

## はじめに

現代の日本社会を象徴するような社会現象として、近年社会問題化した「援助交際」を取り上げることができるだろう。現代日本社会において「援助交際」という売春の行為が顕在化し、喧伝される背景には何があるのだろうか。

本稿の目的は、「援助交際」という社会問題が事実上どのようなものであるかを明確にし、また社会的にどのようなインプリケーションをもってしているのかを明らかにすることにある。そのため、「援助交際」をコミュニケーションとしてとらえることを通じて、そのコミュニケーションの内容を考察する。この考察の基礎となるデータは、援助交際の当事者である女性たちへのインタビューによって得られている。このインタビューをもとに、まず「援助交際」という現象を現状に即して定義し、次にコミュニケーション分析を軸に援助交際の社会的意義を問う。

## 1. 調査の方法

今回呈示する調査データは、現代人の自己イ

メージを探ることを目的とした調査研究の一貫として収集された。援助交際に関する調査は、面接を前提としたインタビュー調査を中心として、ほかにも新聞、雑誌、書物、テレビといったマスメディアの記事を収集し内容分析を行う形で行われている。

調査期間は1997年の5月から現在も継続中であり、調査対象者は男女を含む援助交際の当事者たちで、年齢は問わなかった。ただ調査の方法上、「自分は援助交際の当事者である」、あるいは「自分は援助交際に関係している」と自己をカテゴリー化した人々である。ただここで注意を喚起しておきたいのは、法律的には犯罪である売春の行為をしていると自己認識し、かつそのことが研究者という第三者に知られるという危険を覚悟した上で積極的に話したいという人々であったということである。このことがどのように調査データに影響を及ぼしているのか、あるいは及ぼしていないのかは不確定のままである<sup>1)</sup>。

調査方法に関しては、次の二つの方法を選択した。一つ目は複数の伝言ダイヤルのオープンメッセージ<sup>2)</sup>に、調査の意図の説明と協力を依頼する旨のメッセージを吹き込むという方法と、二つ目はテレクラ<sup>3)</sup>で調査に応じてくれる人を捜すとい

\*キーワード:「お金」という語彙、ロールプレイ、性的アイデンティティ

\*\*関西学院大学大学院社会学研究科博士課程後期課程

1) 調査に応じてない人々がどのくらいいるのか、またどういった人々なのかは知ることはできないし、現時点では安易な類推は避けるべきだと考えるので言及しない。また今回の論文は、筆者が収集したデータに拠っておりその範囲内で分析を行ったため、事例の代表性や一般性を問うことはできなかった。さらに聞き取りデータが女性のみであるという点に関しては、別の箇所でも男性への調査をもとに男性にとっての援助交際について触れたい。

2) 伝言ダイヤルとは、利用者が業者の設けた専用回線に自分のボックスと暗証番号を登録し、伝言を入れるのは自由だが、登録者だけが自分のボックスに入った伝言を聞くことができるというシステムを指す。一定時間の伝言を一定時間プールのできる。

筆者が伝言ダイヤルに吹き込んだメッセージとは、「私は28才の男性で社会学の研究者をしています。今、援助交際をしている女の子や伝言ダイヤルで遊んでいる女の子に、お話を聞くという取材をしています。こういう取材に応じてもいいとか、興味があるという方は連絡下さい」というものである。

3) テレクラとは、テレフォンクラブの略称で男性客が料金を払って個室に入り、一般女性からかかってくる電話を待つシステムを指す。会話の内容は自由である。1985年に東京で誕生した。